
僕のカモネギが強すぎる件について

かまぼこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕のカモネギが強すぎる件について

【Nコード】

N2442BA

【作者名】

かまぼこ

【あらすじ】

最強のカモネギを手に入ってしまった主人公は何故か望んでもいないのにエリートトレーナーになってしまう。そんな変わったお話を。

基本、戦闘はアニメ基準ですのでゲームとは異なったものになります。

出だしからやばい件について(前書き)

勢いだけで書きました感があるのは気のせいです。

出だしからやばい件について

十二歳の誕生日、両親に旅に出ると言われた。突然過ぎて驚きが隠せないままの僕に両手で抱える程の大きさの卵を渡された。すると卵が動き出し、ピキピキとヒビが入り、パツカリと開いた。

中から元気よく飛び出してきたそれは『カモネギ』だった。

カモネギは赤帽子の髭おやじのようなジャンプで、体操選手顔負けの回転をしたと思えば華麗に着地。この間、四秒。カモネギは決め顔でこつちを見てドヤドヤと伺っている。僕が凄く凄いと拍手とセットで褒めるとふっ、とクールな素振りのご対応。

何だこれ……

まさにその言葉がこの状況に適していたと思う。そして僕の引き攣った顔に止めを刺すかの如く、いつものヘラヘラした顔の父が真剣な顔で、

「先祖代々受け継がれてきた家宝だ。持ってけ！」

と、『金色のネギ』を渡された。

思わずそのネギで父の頭をぶつ叩いた僕は悪くないだろう。

軽く半泣きの父は無駄に長い武勇伝を語った。

それは父が昔、カントーのチャンピオンになった話だった。それは凄い事だと思ったがさらに凄い事に、『カモネギ一匹』だけで殿堂入りしたそうだ。

冗談だろ？　　と思い、ありえないと言ったらチャンピオンの証である賞状を見せ付けられた。オマケにカモネギとのツーショットも。ここまで見せられた以上、信じる他なかった。

それから自分からチャンピオンを辞退して公式ジャッジになった話や、母との出会いなどを語ってくれた。

そして母もカモネギ使いだった。昔はライバル同士だったそう。それが友情になり、愛情になり、結婚したのだと。

今では仲のいいカモ……いや、オシドリ夫婦だ。

そんな両親のカモネギもオスとメスだった事もあり、夫婦になった。こうして生まれたのがさっきのカモネギなのだった。

えらく纏まった話につきこむ間もなく、旅の支度を父がしていた事に驚く余裕も無かった。

何だこれ……

「じゃあ、行ってくるよ」

僕がそう言つと母は泣きながら手を振る。大袈裟だな、と思いながらも自分を思ってくれている母に感謝しながら旅へ……

行こうとしたら父に止められた。空気を読んでくれとモヤモヤしたまま耳を傾ける。

『ついでにこれを持っていけ!』

と言われて渡されたのが……正式名称がわからない……

簡易なヘッドフォンのような形状だった。よく見ると、マイクが付いてある。それが二つあった。何だろうと思い、父に聞いてみる。すると父は、

『インカムと言って、ポケモンと会話出来る物だ。まあ、オマケのような物だよ』

こっちの方がすげえじゃねえか! と父をぶん殴ってしまった僕は悪くないだろう。

取りあえず、自分の住んでいた町の隅っこまで来た。後は真っ直ぐ行くだけ。そしたら初めて旅に出る事になるのだ。

そしてまず、僕にはやらなければならない事がある。

そう、このインカムとやらだ。

はたしてこのインカムを使えばポケモンと話す事が出来るのだ

ろうか。唯のドッキリで嘘なんじゃないだろうか。

信頼性の欠ける行動だった為かいまいち信用できない。だが、何事もチャレンジだ。物は試しても言うし。

僕はパートナーであるカモネギにインカムを付け、自分にも付けてみた。何言おうかな？ とりあえず無難なところで……

「今日からパートナーになったランだ。よろしく」

味気無い無難な台詞で試してみた。どう返してくるか楽しみだ。カモネギのクチバシがゆつくりと開き話す。

『ああ、よろしく頼むぞ相棒』

まさかの本物！？ まあ、父は嘘ついた事無かったしな……

… それでも少し疑わざる負えなかったのだ。だってねえ……

まあ、とりあえず、今わかった事はこの機具は本物で、カモネギはメスだった事だ。

何故メスだとわかるのかと言うと、事前に母から聞いていたのもあるが、今の声で確実なものだとわかった。

カモネギはハスキーボイスでクールでカッコイイ女の人のような言動だったからだ。

姐御と呼べばいいのだろうか？ そこんとこ悩む。

『何を悩んでるんだラン、冒険の旅に行こうじゃないか』

独特のかつこよさを見せ付け、僕を急かすカモネギ。急かす……？

「……そんなにこの町から出たいのか？」

疑問を口に出してみた。

「な、何を言うんだ？ 私としては親元を離れなこればいけないんだぞ？ これは生後二時間にも満たない私には不幸な事であつて」
『「じゃあ、戻ろつか？」』「私の負けだよ………」』

ペタンと仰向けになつて服従のポーズをとるカモネギ。ちゃんと金色のネギも足元に置いてある所完璧である。

それは犬がするものじゃないのか？ といった野暮な疑問は口にしない。言ったらそれはそれは悲しい旅のスタートになつてしまつてある。なのでお口はミツフィー。

まあ、理由を聞こう。

「どうして町にいたくないんだ？」

『それが………』

『 』
と云つた具合で………』

「カモネギ、お前もか……」

話をまとめよう。

実は、僕が卵を貰う少し前に、産まれていたそうさ。まあ、あんなタイミングよく産まれる訳ないしね。第一、産まれて直ぐに空中三回転を出来るつわものはそうそういないだろう。

じゃあ何故、外に出なかったのかと尋ねたら、血相変えて、

『私の母親と父親との会話で我が子への期待がとんでもないものだった……』

と羽根を震わせながら語ってくれた。

まさかここまで偶然と言うものは起こるのだろうか。

僕の両親もカモネギの両親と同じ、『親馬鹿』だった。

だからカモネギの話は自分が体験したかのようにわかるのだ。

「カモネギ……僕の両親も……」

最後まで言わずともカモネギは理解してくれた。

『そうか……ランもだったか……』

「ああ、そうさカモネギ。僕達は似た者……いや、似た動物通しだったんだ」

『「これからよろしく頼む相棒!!」』

絆が深まった瞬間だった。

出だしからやばい件について(後書き)

カモネギLV:そくていぶのう

カモネギがかっこよすぎる件について

「カモネギってどれくらい強いんだ？」

一番気になる事を質問してみた。トレーナーとして、やはり、自信がある方が戦いやすいというものもあるし、普通のトレーナーならポケモンのそういった気持ちもわからずに戦っているのだと知ったら尊敬できると思う。そう考えると僕は反則紛いだな、とか少し自分の状況はセコイなと思う。

『強さは口で語れないものだよ』

何このカモネギがかっこいい。イケメン過ぎるぜ相棒。

僕がカモネギのかっこよさを改めて認識していると、鳥系のポケモンの羽音が聞こえてきた。この場所的にはムツクルか？

「ムツクル！」

やはり、ムツクルだ。このわかりやすい鳴き声がポケモンの証拠である。ポケモン図鑑なんて大層なもの持ってないから鳴き声で判断するしかないというワイルドな対策しかない僕はなんなのだろうか。まあ、この際気にしないとして……

「カモネ 「この……！ 言うてはいけない事を三回も言い
やがって！」

カモネギがムツクルにキレてた。このインカムを付けているもの

同士でしか翻訳されないのので何を言われたのかは知らないが、よっぽどム力つく事を三回も言ったんだなと思う。ここはトレーナーとしてカモネギに指示しなければならぬ所で 「ム……クル……」 えっ？

気づいたらムツクルが倒れていた。そして、ムツクルの背後には剣を収めるかの如く、ネギを収めていたカモネギの姿が…… 何が あったというんだ。

『安心しろ。みねうちだ』

みねうちだそうです。

ん？ みねうちってなかなか覚えなくて父が言ってたようない……
… まあ、カモネギだし、そこんとは関係ないよね。

「兎に角、カモネギが強すぎる事はわかった」

『そっかそっか！』

「だけど、僕の指示には従ってくれよ？ まあ、野生のポケモンは仕方ないとして、トレーナー同士の戦いなら向こうは策を練るだろうしさ。頼むよ」

『むっ……まあ、仕方ない。トレーナー同士の時だけだぞ』

カモネギは口を膨らませ、妥協してくれた。よかったよかった。

そして、僕たちはジムリーダーがいる町に着き、そのポケモンセンターで休む事にした。カモネギは疲れてない！の一点張りで中々ポケモンセンターに行ってくれなかったが、旅には休憩が必要だよと、強引に説得して連れてきたのだ。そんなカモネギも今では仲良く他のポケモンと話してたりする。案外気に入ったようだ。

『ほう、そんな軟弱者なのか、君のパートナーは。私が叩斬つてやるっか？』

頼もしいような怖いような発言で盛り上がっているのでカモネギはここに置いといて……少しトレーナーらしい事を考えよう。

まず、バトル方式によってはカモネギ一匹じゃ駄目だよな、ダブルスの場合、強制的に負けになってしまうだろうし。それに別の地方ではトリプルズがあるそうだ。さらにピンチである。

どうしようか……と悩んでいると、グラスンを掛けたおじさんが近づいてきた。そしておじさんは僕に話掛けてきた。

「少年、どうやらポケモンの事で悩んでいるようだね。そんな悩みもこのポケモンがあれば吹っ飛んでしまっけどね」

あっはっはーと高笑いするおじさん。手に持っているボールがそのポケモンのようだ。

「それでだ少年、この伝説のポケモンをなんと！五百円で売ろうではないか！どうだ？お買い得だろう？」

五百円……おじさんの大袈裟な素振りからいいポケモンは期待

出来ないが、取り敢えずポケモンと謳ってるのでいいと思う。おこづかいを貰い過ぎて五百円を使ってもまだまだ余裕はあるし、買おうかな？

「じゃあ、買つよおじさん」

「毎度あり〜〜！」

おじさんはモンスターボールを渡すと、逃げるように走って出て行った。取り合えず、弱いポケモンだという事はわかる。まあ、ポケモンだったらなんでもいいのだ。一応、二軍のようなポジションであるし、一軍さんは二軍に譲らなさそうだし。

そして初めてモンスターボールを使う事に気づいた僕はどっきどきしながら恐る恐るボタンを押した。

「……………」

なんか鯉みたいなのがピチピチ跳ねてる。

「美味しそう……………」

思うわず本音が漏れてしまった。その時に鯉みたいのがびくん！と跳ねたのは見間違いだらう。それと少しづつ僕から遠ざかっているのは気のせいだろう。

あのポケモンの名前はコイキングと言つらしい。よく釣れる事で有名だそうだ。しかも強い弱いとかそういう次元じゃなくて戦う事

すらまともにも出来ないのだとか。

まあ、おいし……じゃなくて、非常しょ……でもなくて、進化するらしいから頑張ってるって育てようと思っ。

『ラン……こいつが怖がってるぞ。食べられるって』

カモネギがじたばたしているコイキングを指さして言った。僕が見るには唯、じたばたしているだけに見えるコイキングもポケモンから見れば怖がっているように見えるのだなと視点について考えてみる。そしてコイキングの今後についても……

『おーい、よだれよだれ』

はっ！ どんだけ魚に飢えてるんだ僕。まあ、魚料理は美味しいから仕方ないといえば仕方ない事でもあるし、コイキングも美味しそうに跳ねるから余計食欲を駆りだたせる効果がある訳で、言い訳とかではないのだ。

こう、生きのいい魚を見るとよだれが出るのは人間の本能的なものであって、魚好きだからというわけではなく、単純に、生物的反応として正しいものであって、成長期兼育ちざかりの年頃としては嬉しい反応だと自負している。だから生け作りにするか炭火で焼くか考えても悪くはないのだ。ポケモンだって動物は動物なのだし、同じ魚と見ても仕方ないだろう。

『コイキング……早く成長しないと……やばいかもしれんぞ』

ふと横を見ると、カモネギの意見を肯定するかのようによく飛び跳ねてるコイキングがいた。

カモネギがかっこよすぎる件について（後書き）

カモネギLV：そくていふう

コイキングLV：5

～おまけ～

ムツクル『えーうつそー、カモネギって進化しないの？ 鳥ポケモンで進化しないって古くない？ 進化しないのが許されるのはエアームドさんだけだよね』

その後、斬られました。

新人が全然働いてくれない件について

僕の将来の夢は公式ジャッジだ。何故？ と聞かれると、あんな変わり種の父ができる仕事だから自分も多少はできるだろうという父をなめた発言で返そう。でも、公式ジャッジというのも大変なお仕事であってポケモンを知る事から技の種類まで様々な事を勉強しなければならぬのだから、楽なんて言うてはいけない。

僕はそんな審判さんをそこらへんのトレーナーより尊敬しています。

だから審判さん。そんな目でカモネギと僕を見るのはやめてください。父を知ってる古参な方だと仰いましたが化け物カモネギだなんて色々引つ掛かりそうですし、カモネギがいつ切り捨てようか迷ってるレベルの怒りで満ちているので逃げてください。こうなると僕でも止められません。

落ち着いて謝罪してください。カモネギにごめんの一言でも言わないとつじぎりが繰り出されそうでごっちも冷や冷やしてるんです。お願いします。

そうそう、落ち着きました？ いやいやいや！ 土下座はやめてください！ こら！ カモネギも踏まない！ もういいです審判さん。いいからジャッジしてください。

はぁ……

「……何これ？」

「こっちが訊きたいです……」

ナタネさんはこの状況をカオスと呼んだ。

「で、では！ これよりジムリーダー戦を始めます」

審判さんが僕の頭の上に乗ってるカモネギを凝視しながら試合開始の合図をだした。……父のカモネギはこの人に何をしたのだからか。同じ仕事仲間として何かあったのではないか？ と思ったがこれ以上この人を刺激すると何仕出かすかわからないのでスルー！。

「ジムリーダーになって初めてよこんな事……」

少し怒ってらっしゃるナタネさんはボヤキながらモンスターボールを手に取った。

「行け！ ナエトル！」

「ナウ！」

カメをヌイグルミサイズにしたようなポケモンを出してきたナタネさん。カメといったら水タイプのイメージが多いと思うのだが、実は草タイプっていう動物詐欺。まあ、この人草タイプしか使わないそうだし、相性的にはこっちの方が有利だと思う。カモネギだった。

「行って来い。『コイキング』」

唯一モンスターボールに入っているポケモンのご登場。頑張ってくれ新人。

「えっ？ コイキン」「コイキング、はねる」

啞然としているナタネさんとナエトル。その目の前でコイキングがピチピチと跳ねているといったカオス満載のバトル。

「それに何の意味が……」

「ん？ 敵を目の前にどれだけプレッシャーに耐えられるかコイキング君が頑張ってるんです」

『……どうせ引き締まった方が美味しいとか思ってるんだろっな』

カモネギのボヤキが聞こえたのか、コイキングの跳ねている姿が助けを求めているように見える。恐らく、僕のせい……なのか？ いやいや、カモネギが悪い。思っても無いこと言うのが悪いんだ。僕がそんなポケモントレーナー以下の妄想するわけじゃないか。

……可哀相なので戻してあげよう。

「ごめんなコイキング」

コイキングを引っ込めた。よく頑張ったよコイキング。君の恨みはカモネギが晴らしてくれるよ。

てなわけで、

「頼んだ！ カモネギ」

『指示を頼むよ』

僕の頭の上から降りたカモネギは、クールに着地し、家宝の金色のネギを構えた。こっちから見たらやべえ！ 姉御かけえ！ だけど、ナタネさんから見たら、カモネギが何故か金色のネギ構えてる……といった大層シユールなものだろうな。

「カモネギ……例え相性が悪いからって草タイプは負けないわよ！ ナエトル、はっぱカッター！」

「トル！」

「カモネギ、こうそくいどうからのいあいぎり！」

『わかった！』

次々と飛んでくるはっぱカッターを華麗に交わし、ナエトルの正面に立った。そして持ってたネギで叩き斬った。ナエトルは地面に叩きつけられ、その叩きつけられた衝撃で砂が舞い、ナエトルとカモネギの姿が見えなくなった。

そして徐々に砂煙は薄くなり、カモネギとナエトルの姿が見えた。

「なっ……ナエトル戦闘不能！ カモネギの勝ち！」

「ちょ……！？ 一撃！？」

あれ？ 確かカモネギって生後二日じゃ…… まあ、サラブレッドだし、深く考えたら駄目だ。カモネギだし。 何があったって驚いたりしないぞ。

「くっ……お願い！ チェリンボ」

「チェリ！」

動くさくらんぼみたいなのを繰り返すナタネさん。だが、調子のいいカモネギは止められない。

「先手を……チェリンボ！ やどりぎのたね！」

「カモネギ！ エアスラッシュで吹き飛ばしてからつばめがえし！」

と、指示した瞬間、気づいたらチェリンボが倒れている光景が…

…

「あれ？ チェリンボってじばくか何か使えましたっけ？」

「……あなたのポケモンでしょう？」

「初心者トレーナーですから」

冗談はやめてほしいわ、とため息を吐くナタネさん。 真実は知らないほうがいいよね？ でも言いたくなるが現状。 とりあえずありのまま起こった事を話すと、僕の指示を聞いたと同時にカモネギが動き、やどりぎのたね事チェリンボにエアスラッシュで飛ばし、チェリンボの頭上に飛び上がり、つばめがえし。

つばめがえしは威力が低いのだが、その分、絶対に当たる技。だから、選んだのだが、まさかの一発KO。はつきり言っこのカモネギにつばめがえしって反則レベルじゃないか？絶対に当たる一撃必殺みたいなものだろ？……いざとなったら使おう。

「ではポケモンを変えてください」

ジャッジが吹っ切れたような顔でナタネさんに言った。もうそれは清々しい程に吹っ切れていた。

「確かにそのカモネギは強い！　だけど私のロズレイドに勝てるかな！」

一旦、ここで飛ばさしてもらおう。本人の尊厳に関わる問題なので伏せる。

結果は……うん、まあ、ねえ……

「これがフォレストバッジよ。もうそのカモネギはやめて……」

軽くカモネギがトラウマになったらしく、カモネギを僕の背後に隠した。まあ、意味がわからないよな。マジカルリーフをエアカッターで撃ち落とすなんて……　しかもトドメがリーフブレードという嫌がらせ。ちなみに僕の指示ではなく、カモネギの独断。……僕いらなくない？　やめよう、悩んだら負けだ。

「兎に角、これで初トレーナーバトルで初ジムリーダー戦か。いい

思い出になりそうだな。カモネギ」

『コイキングもな』

その辺は触れてあげないでください。コイキングさんもいつか大きくなってカモネギをも倒……無理だな。

「まさか本当に初心者だったとは……」

また凹んでるナタネさん。いつも明るい熱血キャラって聞いてたんだけど……うん、カモネギ強い。

そして何か咳いてるんだけど……

「……………そのカモネギを操れるトレーナーも逸材だし、うん！君、ジムトレーナーにならない？ここじゃなくてイッシュ地方のフキヨセシティって所のだけだ」

「ジムトレーナー？」

何だか職に付けそうだ。

新人が全然働いてくれない件について（後書き）

カモネギLV：そくていふう

コイキングLV：10

仲間が増えた件について(前書き)

ばいばいコイキング(4話)

仲間が増えた件について

「ジムトレーナー？」

そう聞いた僕はポケモンに関する乏しい知識の中から必死に検索してみた。確か、ジムリーダーの下についているトレーナーで、一般のトレーナーよりも一段と強いトレーナーのみ慣れる職業だったっけ？

「『 うん、ひこうタイプだったら大歓迎？ OK、直ぐそっちに送るわ』」

ナタネさんがポケギアでおそらくフキヨセシティのジムリーダーと連絡を取っている。あれ？ まだ決めてないのに行く事になってない？ まあ、行くけどさ……

「はい、これ地図」

イッシュ地方の地図を渡された。

「じゃあ、いってらっしゃい」

ジムから追い出された。

……扱い酷くないか？ そう思ってナタネさんの顔を見たら笑顔だった。引き攀っていたけど。

「ちょ……！？ 直ぐ行くって、イッシュですよ？ 飛行機で一泊

レベルですよ？」

流石に無理なのでツツコンでみた。

「……そのカモネギなら大丈夫じゃない？」

いやいやいや！ いくら天下の姉御でもそれは無理ですってば！
堆積と面積の構造上不可能ってレベル。カモネギも嫌そうな顔して睨んでいるに違いないと後ろを振り向くと、

『大丈夫だ！』

さわやかにサムズアップされた。

流石に大丈夫だとしてもこの小さなカモネギに乗ったら鬼畜トレーナーのレットルを張られかねないので却下した。基本、ポケモンに優しくをモットーとしているのでそういった行動はしたくないのだ。

てなわけで最後の手段に出た。

『……それが最後の手段か』

カモネギの目線の先にはモンスターボールがあった。そして僕の目線の先にもモンスターボールがあった。

そのモンスターボールには【予備】と書かれており、怪しさで包まれていた。

「使いたくねー……」

このボールは父から、カモネギではどうしようもない時に開けると言っただけ渡されたのだが、何が入ってるかは聞いてない為、運試し要素しかない危険な賭けなのだ。

『そんな時間もないだろう？ 開けるぞ』

勝手にモンスターボールのボタンを押すカモネギ、いや、まだ心の準備ができてな 「トロアアア！」 「ごふっ!？」

何か緑の巨体にタツクルされた所で僕の意識は途絶えた。

目が覚めたら天井でもなんでもなく、空が見えた。あまり空なんか見上げる事無かったから綺麗だなと眺めているとカモネギが……カモネギ？

『良い知らせと悪い知らせがあるぞ』

「……良い知らせから」

『うん、仲間が増えたぞ』

「トロオオオオ！」

限状況を確認してみると、僕は、おそらく気絶した原因であろうポケモンの上に乗って、空を飛んでいた。空が綺麗だと思ったのは

至近距離で見ているからなのかと納得していると、カモネギが不思議そうに尋ねてきた。

『もっとリアクションあってもいいんじゃないか？』

「いや、驚いたら父の思う壺だし、もうカオスに馴れたから」

あははと笑って見せたのだが、目だけはどうしても笑えなかった。

『あえて触れないでおこう。……話を戻すぞ。そいつはトロピウスっていうポケモンだ』

「ピウ！」

トロピウスと呼ばれたポケモンはヤシの木と恐竜を混ぜたようなポケモンだった。威厳のようなものがあって神々しく見えた。

「よろしくな、トロピウス」

「ピウウ！」

『よろしくッスって言ってるぞ』

トロピウスってそんなキャラなのかよ！ 優雅なキャラと思った矢先にこの始末だよ！ もう驚くとかそういう問題じゃねえよ！

「トロオ？」

『どうしたんッスカ兄貴？ って言ってるぞ』

兄貴って……なんで舎弟キャラなんだよ…… もついいよ。トロピウスはトロピウスだよ。

『これが良い知らせだ。次に悪い知らせだが……』

カモネギが嬉しいか悲しいか微妙な顔をする。その微妙な反応が何とも反応しづらい。悪い知らせと謳っているので不幸な事なのだと思うが、このほっとしたような顔は何なのだろうか。

『実は……』

「実は？」

『コイキングが逃げた』

「なっ……なんだってー！？」

まさかあの美味し……いや、あの、美しいフォルムのコイキングが逃げただって！？ そんな！ もう少しすれば美味しく……いや、進化したのに！ どうしてなんだ！ いつか食べ……強くなると信じてたのに！

『あのとっしんされた時にな、ちょうどポケットから飛び出して一目散に逃げたよ』

「ああ、コイキング。君の事は忘れないよ……」

生け作り丸焼きから揚げ照り焼きホイール焼き鍋焼き包み焼きフライにソテーに炊き込み……

「お腹空いた」

『もう絶対に水タイプは捕まえるな！ 絶対にだ！』

水タイプ禁止令を出されました。

「はっやいなー」

フキヨセシティに着きました！ 一日は最低かかる筈な所に時間単位で着くのがポケモンの……いや、トロピウスの凄い所だな。そのトロピウスも流石に疲れたようで今はモンスターボールに引っ込めてる。いつかの逃げた魚のように反抗的では無いのが良いところだな。

『いや、遅いな。私なら分単位で行けた』

ふんっ、と少しご機嫌斜めなカモネギ。まあ、大丈夫だとは言つてたけど流石に大きさの問題もあるし、たぶん、カモネギの速度なら振り落とされてたと思う。

「いやいや、トロピウスも早かったよ。流石ひこうタイプってことだよ」

カモネギとポケモンの話をする光景とはなんてシユールなのだろうか。

周りから見るとカモネギと会話している変人に見えるのだろうか

考えていると、後ろから女の人の声がした。

「そう！ ひこうタイプは最強なんです！」

何だこの人…… 目をキラキラと輝かせながらやって来たその人の服は明らかに浮いていた。

仲間が増えた件について（後書き）

カモネギLV：そくていぶのう

トロピウスLV：20

生け贖にされた件について（前書き）

ヤンデレっぽく見えるのは気のせいです。絶対。

生け贄にされた件について

「ではひこうタイプの素晴らしい点を小一時間程度話しましょう！」
「結構です」

「……じゃあ、どうしてひこうタイプが優れているのかについて語りましょう！」

「遠慮ときます」

「さ、三十分だけでも……」

「お断りします」

「うつつ……」

シヨボーンとした顔でこっちを見る変な服の人。とりあえずひこうタイプが好きな事はわかった。だけど、この明らかに浮きすぎる服なのに周りの人は特に気にしていないようだ。

寧ろ、カモネギを頭の上に乗せている僕の方が気になるらしく、さつきから子供が僕を指さしている。なんだこの晒し……

まあ、この人がフキヨセジムのリーダーである事は間違いないだろう。ジムリーダーは基本、そのタイプが大好きな人ばかりだし、さつきからひこうタイプひこうタイプ連呼してるしね。

「話しそうよ」

ぶーぶーと口を尖らせ、僕の肩を持って揺すってくる。流石にイラッときた僕は脳天に一発軽いチョップ。あいた！と言ったが実際そこまで痛くないはず。そして表情を変えるのが苦手な僕は声を低くさせ、

「流石に今日は忙しいので明日なら……」

と、直訳するとうつとしいんじゃボケ！ になりそうな台詞でやり過ぎず。

まあ、知らない土地に来たわけだし、何処かの宿でも借りないといつもの野宿コースなので必死に借りなければならぬのだ。お金には余裕があるし、あの後、審判さんから謎の大金を頂いたしね。

「忙しいとは？」

「宿や食事とかですかね。今回は長く留まりそうな気がしますし」

「じゃあ、そのマンションを借りましょう。確か一階は空いてるし」

「その超高級マンションを？」

「はい！」

このひこうタイプ好きが指さした先には田舎者の僕には入りづらい大きなマンションだった。いかにも高級そうな雰囲気があるなど貧乏人の僕には一生無関係だなど思う程だ。

「うーむ、滞在日数によりますねジムリーダーさん？」

「ぬおっ！ どうして私がジムリーダーとわかったんですか!？」

オーバリアクションを見せる変な人。素でびっくりしたらしい。

「そんなド派手な格好でひこうタイプ大好きでド派手な格好ですしね」

「一回も!？」

目立っている事に気づいていなかったそうなの。

「それで、えーっと、目立つ服の人さん」「フウロでお願いします……」「ではフウロさん、主な仕事な内容を教えてください。それによって滞在日数も変わると思いますし」

「うん、じゃあ、私の話相手で、次にジムトレーナーとしての仕事。だけど、ラン君無しでも出来るから主に私の話相手だけですな!」

大体の原因がわかったので、周りの人々に目を向けてみた。 ……

…思った通り全員から目を逸らされた。

……僕なりに解釈するとフウロさんのひこうポケモンに関する話にはうんざりしていたフキヨセの人々はいい身代わりはなしばいりを探していた。それはこの町の人ではなく、何も知らない人が好ましく、フウロさんと近い距離に当たる人物がベストだと。

そんな時に、カモネギ一匹（コイキングは含まれないので）でジ

ムリーダーを倒した人物がいたとの連絡が入り、フウロさんは喰いついた。そんなジムリーダーのポケモンを無双できる鳥ポケモン、しかも、この辺りでは珍しいポケモンだからその人物を呼び出すだろう。

さらに、そのカモネギ使いはカモネギ一匹だけ（コイキングなんていなかった）を持ち、ジム戦に挑む根性があり、よっぽどの鳥好きなのだろうと誰しもが思うだろう。つまり僕は……

唯いけにえの話し相手じゃないか。

「……わぁお」

「どうしたんですか？」

「いや、なんでもありません。それよりもまず、敬語をやめていたのですが……」

不安定な敬語が少し気になったのでやめてもらえるよう頼んでみた。

「わかったけど、ラン君もやめるよね？」

「まあ、そうなるよね」

「うんうん、それで、今日は何処にお泊りですか？ マンションを勧めたけど、そこの一軒家でもいいんじゃない？」

フウロが指さしたのはマンションの隣に小ぢんまりと立っている一軒家だった。小ぢんまりと僕は例えたが、実家と同じ……いや、

それ以上の大きさの家だった。隣のマンションがあまりにも大きい為が目立たないのだ。うーむ、良い家じゃないか。

「でもなー、お金に余裕が」 「それぐらい頼んだら大丈夫だよ」

そう言い切ったフウロはポケットからポケナビを取り出し、誰かに連絡を取った。おそらく相手は不動産関係の人だと思われる。会話は聞きたくなく、ではなく、プライベートというものがあるのさ。いや、本音をぶちまけると聞きたくない。いくら現実逃避かよ（笑）とか言われたつてもう聞きたくない。だって、目がおつそろしいんだもん。あれは獲物を捕らえたライオンの目をしてらっしやるもん。

「『 出世払いで……それならあなたが……短いから……六時間程……』」

恐ろしい単語が所々聞こえてくるのは気のせいだ。たぶん僕には関係ない世間話で盛り上がっているのだろう。ふと、ずっと静かだったカモネギの方を見てみた。

『 ……あれには勝てん』

と、呟き、僕の背後に隠れ、フウロから見えないような死角に座った。

……じゃあ、誰が勝てるんだよ。

「『 うん、じゃあ、それで』」

自分の意見が通ったようで満足気な顔をしているフウロさんは通信を切り、ポケナビをポケットにしまった。

「喜んで家を貸すって！」

「絶対嘘だ！」

「だって泣いて喜んでたし」

「それガチ泣きだって！」

フウロさんの笑顔はどこか恐ろしいものがあるとカモネギが語ってた。……僕もわかるよそれぐらいさ。

そして、借りた家の中に入った俺とカモネギは、改めてフウロさんの恐ろしさを知るのだった。

家具に電気製品、それに食糧までもが用意されていた。それに封筒に入った謎のお金。

……これから僕は何させられるんだろう。その日は恐怖で眠れなかった。

生け贄にされた件について（後書き）

ステータス変わらず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2442ba/>

僕のカモネギが強すぎる件について

2012年1月9日06時45分発行